

---

# シャトールーの王女

Tomo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シャトーラーの王女

### 【Nコード】

N3680BA

### 【作者名】

Tom o

### 【あらすじ】

一ノ瀬真は、携帯MMORPG「World of Legends」をプレイすることと、クラスのアイドル・雨宮紫を遠くから愛でること以外には人生の楽しみを持たない平凡な高校生だ。ところが、ある日突然、罰ゲームで雨宮紫に告白しなければならなくなってしまった。さらに、銀髪美少女の転校生まで現れて大騒ぎに。そんな時、真のプレイする「World of Legends」の世界では大きな変化が起きていた。

「カルパントラ軍はその勢約2万5千。一両日中には先陣が王都に到達する見込みです。対する我が王都防衛の軍は約5千。ビエル方面からの援軍は約3万、到着には最低でも4日かかります」

シャートルー王国、エキユイエ王城内の一室に、近衛軍の幹部が慌ただしく集まって軍議が開かれていた。南方の国境を接するカルパントラ王国がシャートルー王国に電撃侵攻を開始したのが約1週間前。シャートルー軍は、予想外の事態に軍の展開が遅れた上に、王都防衛上の重要拠点での痛恨の戦術ミスが重なり、わずか1週間で王都への接近を許してしまった。

「加えて、カルパントラに内通して反旗を翻したファシユ、ランジェサンの計3千の軍が北方に王都を挟撃する形で展開しており、カルパントラ軍の到着に合わせて王都への攻撃を開始すると思われます」

更に状況を悪化させているのが、味方の裏切りだった。ファシユ、ランジェサンは、この20年ほどの間にシャートルーで飛ぶ鳥落とす勢いで急成長を遂げた新興貴族だ。その2氏がカルパントラの侵攻に合わせて反旗を翻しており、王都は2正面作戦を余儀なくされていた。

「最低限4日間、王都を守りきれの可能性は？」

近衛軍は王直属の軍で、目的は王と王族を守ることであり、国と国民を守る責務は課せられていない。全軍が王城内に駐留していて、その勢約500人。今行われている軍議は、いかに王都を守るかで

はなく、いかに王と王族を守るかであった。

「戦いが始まる前に王を王都から脱出させることはできるか？」

「背後はファシユ、ランジェサンの軍で抑えられていて、もう、手遅れかと」

「くっ」

シャートルーには近衛軍の他、衛士軍えいしぐんと呼ばれる王家直属の常駐兵力が国境や主要都市の警備と防衛に当たっているが、戦力としてはそれほど多くはない。防衛にしろ反乱鎮圧にしろ侵略にしろ、主体となるのは貴族の私兵であった。そして、今回の王都防衛の主力も、やはり彼ら貴族軍である。

「貴族軍が頼みの綱か」

と、突然、部屋の扉が勢い良く開かれ、鎧を身にまとった少女が飛び込んできた。

「私を差し置いて軍議とは何事だ！」

「リゼット様。どうしてここに！？」

「シン。私も戦うぞ」

シンと呼ばれたのは、軍議に集まる幹部のなかでもひとときわ若い少年だった。歳は16、7歳ほどではあったが、その年にして近衛少将の地位についていて、貴族の待遇を受ける身であった。シャートルーでは貴族は世襲ではなく、貴族の子であっても必ずしも貴族になれるとは限らないため、自らその資質を示す必要があった。シンがこの歳で貴族の身分にいることは、その資質がひとときわ高いことを物語っていた。

対して、軍議に飛び込んできたリゼットと呼ばれた少女は、シンと同じく16、7歳ほどの美しい少女だった。腰まである銀色の髪はゆるやかにウェーブを描いていて、耳の先が尖っていた。身長は約150センチメートルと小柄で、胸の方は少々残念であったが、快活さが全身からにじみ出ている、思わず人目を惹きつける魅力を持ち、誰もが認める美少女であった。シャトールー王国を建国したエルフの末裔であり、現国王の一人娘、唯一の王位継承者であった。

「いけません。私たちはリゼット様をお守りするためにいるのです。そのリゼット様が戦場に出られては、私たちの意味がありません」

「シン。私はまだ若輩だが、今がどのような状況かは理解している。王都は四方を囲まれ、逃げることは叶わない。圧倒的な寡勢で王都を数日間防衛して、援軍の到着を待つことだけが唯一の望みだと。それなら、私も戦場に立って、皆と一緒に敵を食い止めるのが最善だ」

「いけません」

「どうしてだ！？ 王女とはいえ、私も騎士としての訓練を受けている。戦力としては近衛少将と並ぶほどには…」

「どうかご辛抱ください、リゼット様」

「っ…」

「リゼット様は建国の母エメ様の直系の子孫でいらっしゃいます。たとえ王都が落ちたとしても、リゼット様が生きていれば、シャトールーが滅びることはありません」

「…」

リゼットは何も言い返さず、シンを睨みつけると、そのまま大股で部屋を出ていった。

「リゼット様！」

シンは近衛大将に一礼して、リゼットを追いかけて部屋を出ていった。会議の途中であったが、誰もそれを咎めるものはいなかった。シンがりゼットのお気に入りであることは、近衛軍の中では誰もが知ることであり、気性の荒いリゼットをなだめることができるのは、シンを置いて他にはいなかったからだ。今回の作戦でもシンの役割はりゼットの護衛であり、ここでリゼットの機嫌を取ることが作戦会議に優先すると受け取られていた。

## 01（後書き）

### 用語解説

シャトールー王国

この話の舞台となった王国。首都はエキューエ。北方に第2の都市ビエルを持つ。

カルパントラ王国

シャトールー王国の隣国。

シン

シャトールー王国近衛軍の少将。

リゼット

シャトールー王国の王女で唯一の王位継承者。

「…ろー、兄貴ー」

遠くから呼び掛ける声に、一ノ瀬真の意識は現実世界に引き戻された。

「…、もうちょっと…」

しかし、一度覚醒した意識は、すぐに再び夢の世界に戻って行った。

…

「兄貴！ いつまで寝てんだ。遅刻するぞ」

さつきよりはるかに近くから叫ばれた声に、真は慌てて目を覚ました。

「やべ。二度寝した。凜、今何時？」

「7時40分」

「マジで？ ギリギリじゃん」

真が急いで着替えようとベッドから飛び起きたところで、股間に硬いものが当たって激痛が走り、悶絶して倒れ込んだ。

「いくら妹が可愛いからって、朝から興奮し過ぎだ」



「…、これはただの生理現象だ…」

一ノ瀬真はただの平凡な高校1年生の男子だ。家の近くの高校まで徒歩で25分、歩いて通っている。なぜか自転車通学は徒歩30分以上の場合と決まっているので、歩いて通わなければならないのだ。ちなみに真の読み方は「まこと」ではなく「しん」だ。よく間違えられるので注意するように。

そして、真の部屋に侵入して股間に蹴りを入れたのが、真の妹の凜だ。「しん」の妹が「りん」とか手抜きとしか思えない。中学3年生で真の1つ下だ。兄の真が言うのもナンだが、凜は美少女だ。特に中学生とは思えないその成長したボディラインが大きな魅力だ。はつきり言ってその胸とか兄として妹でなければ一度触ってみたい。

「兄貴、どこを見ている？」

「…、いや。どこも見えていない。断じてだ！」

「ふんっ。…、朝ごはんできてるから、さっさと食べてよ」

そして、この屋根の下には真と凜の他は誰も住んでいない。都内のそれなりに立派な1軒屋に兄、妹の2人暮らした。母は7年ほど前に事故で他界している。父は有名企業の専務だが、故あって別れて暮らしている。その辺の事情は機会があれば説明できるかもしれない。

「痛い…。眠い…。昨日、アレ、やりすぎたかな」

真は蹴られた股間を押えながらつぶやいた。凜はもう部屋から出た後だったので誤解されることはなかったが、アレとは決して性的なアレではない。股間を押さえていることは無関係だ。アレとは「World of Ledgends」、略して「WoL」と呼

ばれる携帯ゲームのことだ。

真は平凡な高校生で、人生の楽しみは2つしかない。その内の1つがWOLという、携帯MMORPGと呼ばれるジャンルのゲームだった。昔は携帯でMMORPGを作ってもハードやネットワークの制限のためになかなか人気化しなかったが、携帯の高性能化によりここ数年で急速に市民権を得てきた。WOLはそんな新世代の携帯MMORPGの草分け的存在で、今ではPCやゲーム専用機の有名MMORPGを超えるユーザー数を誇っている。

真がWOLを始めたのは、WOLが夜に出た直後の3年前、中学1年生の時だった。以降、真は少なくとも時間を投入してゲームを攻略してきて、今では多少名の知れた古参プレイヤーになっている。昨日も真は寝る前にベッドの中で4時間ほどゲームに没頭していた。そのせいで若干寝不足だ。

「いけね。急がないと遅刻する」

## 02（後書き）

用語解説

一ノ瀬真

主人公。平凡な高校1年生の男子。

一ノ瀬凜

真の妹。中学3年生。

WOL

携帯MMORPG「World of Legends」の略。

「うしゃー。お・れ・の・か・ち！」

「マジかよー」

真の前で大げさにガッツポーズをしているのは、真の悪友の橘総司だ。真とは小学校からの付き合いで、なぜか毎年同じクラスになっている。そして、何に勝ち誇っているかというと、

「真くん、保健体育といえども義務教育だよ」

「高校は義務教育じゃねえよ」

「ふふん。そんなトリビアを披露しても、君が期末試験の総合得点で負けたことに変わりはないんだよ」

真と総司は高校1年1学期の期末試験の総合得点を競っていたのだ。そして、たった今、最後の保健体育の試験結果で総司が逆転して真に競り勝ったのだった。

「くっそー。保健体育が100点とか、学業の優先順位間違ってるんだろ。ていうか、ただのエロだろ」

「ああエロだ。それがどうした」

総司の野郎は教室のど真ん中で、清々しい顔でエロ宣言をしゃがった。周りの女子、ドン引きしてる。俺まで同類に見られるだろうがっ！と真は心のなかで叫んでいた。

「まあ、それで罰ゲームだ。何がいいと思う？」

「考えとけよ！」

「もちろん考えてたよ。でも、何も選択肢を与えられないのは可哀想かなと思ってね」

「選択肢？」

「そう。選択肢は1つ！」

「一択じゃねーか」

罰ゲーム。総司のやつがこんなに浮かれてやがるのはそのせいだ。真と総司は期末試験前に総合得点で負けた方は勝ったほうの命令を何でも1つ聞くといい賭けをすることにしたのだ。真が勝ったら総司に夏休みの宿題を全部押し付けるつもりだったのだが、総司は何を考えているのか。この浮かれぶりだとろくな事じゃないに違いない。

総司はきよろきよろと周りを確認すると、耳元に口を近づけて何かをささやいてきた。

あまみや ゆかり

「雨宮紫に告白しろ」

「！！ x 、なっ、何を！」

真は、思わず大声を出してしまって、慌てて口を閉じた。周囲の視線が痛い。

「やー。お前、好きなんだろ？ ばればれだよ？ なんせ1日中、ちろちろ雨宮さんの方を見てるんだからな」

「な、な、何をおっしゃい…」

「まー、だからこの際すつきりしちゃえばいいんじゃないかと、真の親友としては思うわけなんですよ」

話だけ聞くと、総司はめちゃくちゃいいやつに思えるかもしれないな

いが、そんなわけではない。雨宮紫はクラスのヒロインで、その美貌は1年生だけでなく、上級生にまで噂が広まっているというくらいだ。すでに何人が告白して、すべて断られているという噂も聞く。つまり、真が告白しても万が一にも勝ち目はなく、無様に振られるのを楽しもうという魂胆なのだ。

「この鬼っ！ 悪魔っ！」

「何を言ってるんだ。俺は親友のことを思って協力してあげようと言ってるんだよ。雨宮さんは俺が責任を持って呼び出しておくから、お前は待ち合わせの場所に行って告白するだけでいいよ」

つまり、勝手にこそそこ隠れて告白しないで、俺が影で覗いてるから、その目の前で告白して振られる、ということだ。総司の満面のニヤニヤを見て、真はとりあえずぶん殴っておきたい気分になったが、さすがにそんな派手なことは目立つので、見えないところですねを蹴っておいた。

「痛って」

「ふん。自業自得だ」

「まあいいや。とにかくこれで罰ゲーム成立だ。今日の放課後までには準備しとくから、お前は心の準備をしとけよー」

総司が去った後、真は頭を抱えていた。精神的に。総司のことだからどうせいやらしい罰ゲームを考えているに違いないとは思っていたが、真と総司なら真の方がいつも成績が上なので、総合得点で負けるとは思っていなかった。まさか副教科ばかり勉強してアホみたいな高得点を取ってくるとは思ってもよらなかった。

「うー。マジかよ」

### 03（後書き）

用語解説

橘総司

真の悪友。

雨宮紫

読みは「ゆかり」。クラスのアイドル。真の片思いの相手。

真は平凡な高校生だ。そして、人生の楽しみは2つしかない。1つはWOL。もう1つは雨宮紫だった。出会いは衝撃的だった。主に真にとって。入学式当日、いつものように総司とだべりながら教室に入ると、そこに天使がいたのだ！

え？ いまいち衝撃が伝わらない？ だから天使がいたんだって！ その天使の名は雨宮紫。身長162センチメートルでモデル体型。髪はロングのストレート。胸はボディーラインを崩さないギリギリのラインで存在を強く主張し、くびれた腰、持ち上がったお尻、細くて長い脚、ぱっちりとした目に魅力的な唇、そして笑顔、その全てが真の心を驚掴みにした。

真は紫を一目見て、この数奇なめぐり合わせを神に感謝した。そして、それから真の日課に雨宮紫を観察することが付け加わった、というか、日課の大部分が観察することに置き換わったのだ。

え？ ストーカー？ 違います。天使を愛することは神に祈りを捧げることと同じ。紫は真の天使だから、紫を観察することは真の信仰心の発露なのだ。

と、授業中、若干危ない思考に陥っていた真の下へ、総司から伝言を書いたメモが回ってきた。

「今日の放課後、講堂のロビーに来い 総司」



それは罰ゲームの場所の指定だった。もう紫からアポを取ったとは、総司の行動力は只者ではない。というか、どという名目で呼び出したんだろうか？ 真は総司のメモを見て、放課後のことを考えて胃が痛くなってしまった。

放課後の告白の場所として、講堂のロビーというチョイスは絶妙と言えた。定番の校舎裏は体育館があつて、放課後は運動部の部員が往復していて落ち着かない。ならば屋上はと言つと、そこは演劇部のテリトリーだった。奴らは毎日屋上で発声練習をしているのだ。

その点、講堂は特別なイベントがなければ放課後は施錠されていて人気は全くない。講堂のロビーとは講堂への階段を登った所の少し広い踊り場のことだ。近くにはめったに人が使わないトイレもあつて、総司が隠れて盗み聞きするにはうってつけの場所でもある。

「あー。何て言えばいいんだろ」

放課後、緊張でおしっこが近くなつてしまった真は、講堂へ行く前にトイレに向かった。用を足した後、真は石鹸を使って丁寧に手を洗った。アレを触っておしっこが付いた手のままで告白するなんて考えられない。天使は天使。そんな不浄のものが近づいて、万が一汚れてしまったら大変なことになる。

手を丁寧に洗っていたおかげで、少し遅くなつてしまった。急いで真が階段を登ると、紫はすでにロビーで待っていた。

「ごめん。もしかして、待たせた？」

「ううん。大丈夫。今来たところだから」

そう言って、紫は真に笑顔を見せた。超至近距離（約2歩）で見る天使の笑顔！ それだけで真は胸が満たされて、もう死んでもいいと思えた。ありがとう総司。さっきまで恨んでいたが、今は総司が神様に思えるよ。

「一ノ瀬くん？ どうしたの？」

「えっ？」

「なんか、今、ぼーっとしてたから」

「あ、いや、あの…」

天使が名前を覚えていてくれたという事実には舞い上がりそうになった真だが、今日の目的を思い出して気を引き締める。これから真は絶体絶命の神風特攻を敢行しなければならぬのだ。胃がギリギリと音を立て、心臓はバクバクと暴れだし、頭は熱を持って思考を妨げる。100通り以上も考えた告白の言葉は、今や一言も思い出せない。

「…」

真は次の言葉を探そうとして、そのまま固まってしまった。な、なんて言えばいいんだ。対する紫は、なぜか頬を赤らめて真の胸あたりを見つめて、真の言葉を待っている。ものすごく可愛いが、今は観察している時間ではない。

「あ、あのっ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3680ba/>

---

シャトルーの王女

2012年1月10日19時48分発行